

### 社会人大学院生の論文執筆に関する特性実務上の執筆習慣と干渉するか

西谷内, 博美 / Nishiyauchi, Hiromi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学公共政策研究科『公共政策志林』編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

公共政策志林 / Koukyo Seisaku Shirin : Public Policy and Social Governance

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

2024-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030831>

# 社会人大学院生の論文執筆に関する特性 実務上の執筆習慣と干渉するか

Characteristics of adult graduate students in academic essay writings:  
Any conflict with business writing practice?

西谷内 博 美

## 要約

社会人大学院生の多くが勤務先で文章を書く機会をもっている。そして、勤務先で書く実務的な文章と、大学院で書くアカデミックな文章では、期待されるモードが異なる。それゆえに、勤務先での文章の書き方が身につけているからこそ、学術論文を書くことに一般の学生より苦勞するといったフラストレーションを覚える社会人院生が少なくない。社会人院生が実務的な文章の書き方に慣れていることは、学術論文を執筆したり、書き方を学んだりするうえでの阻害要因になるだろうか。言い換えると、両者の執筆モードは不可避に干渉し妨げあう関係にあるのだろうか。本研究では、この問いを元に、社会人院生の実務的な執筆習慣と学術的論文の発表実績および執筆能力との関係について検討した。調査方法はアンケート調査で回答数は50人。そこで得られたデータを記述的分析とフィッシャーの確立検定を用いて分析した。結果として、実務上の執筆習慣は、学術論文を執筆したり学んだりするうえでの阻害要因ではなく、むしろ促進要因であることが示唆された。また、実務上の執筆習慣と学術的な執筆のモード切り替えに混乱を覚える要因としては、両者の執筆モードが干渉し対立する関係にあるからではなく、学術論文執筆能力の不足に起因する可能性が見いだされた。

## キーワード

社会人大学院生、実務経験、アカデミック・ライティング、執筆モード、学術論文執筆能力

## 1. 序論

わが国の大学院入学者数における社会人の割合は約14%。課程別にみると、修士課程では約9%、博士課程では約42%が社会人である（2022年度）。この傾向は、この10年間おおむね変わっていない<sup>1</sup>。それら社会人大学院生（以降「社会人院生」）はどのような学問的特性を持っているだろうか。大学院生の1割以上が社会人院生であることを踏まえるならば、社会人院生に特有の学問的特性を考察することは重要な研究課題であろう。

しかし社会人院生の学問的特性についての研究は

これまであまりなされていない。近田政博によると、日本の大学院教育の研究には二つの潮流、すなわち国家政策などを扱うマクロな制度的研究と、学生の葛藤などを扱うミクロな心理学的研究がある。その中間に位置する、また本研究が扱うような、教育実践に関する研究はほとんど行われてこなかったという（近田 2008: 76）。大学院教育研究全体の中なかでも研究蓄積が薄く、さらに社会人院生のそれに限ってみるならば、本研究テーマについての先行研究はきわめて限定的である。

その数少ない研究蓄積において、社会人院生の学問的特性は次のように説明されている。学習意欲が

高く、研究関心が具体的であるといった社会人ならではの利点が指摘される。反対に、固定観念にとらわれやすい、時間的制約がある、それと関連して学生同士で切磋琢磨する機会が少ない、よって研究の進捗が指導教員との関係に左右されやすいといった社会人ならではの欠点やディスアドバンテージも指摘されている（近田 2008, 2015; 中村ほか 2019）。また、社会人院生に限った特徴ではないだろうが、学術論文を書く上での基礎的スキルの不足、より具体的には文献調査に慣れていない、調査手法を知らない、批判的な考察に慣れていないといった特徴も指摘されている（近田 2008; 中村ほか 2019; 三輪 2020）。

ところで、社会人院生の多くは勤務先で文章を書く機会をもっており、報告書、企画書、議事録やマニュアルなど、さまざまな文章を執筆する（西谷内 2023）。そのように実務で執筆する習慣は、大学院で学術論文を書いたり、またその書き方を学んだりするうえで役に立つのだろうか、それとも障害になるのだろうか。そのような実務上の執筆習慣と学術論文の執筆パフォーマンスとの関係についての研究は管見の限り見当たらない。本研究は、社会人院生の学問的特性に関する、新しいテーマに取り組むものである。

この研究課題は次のような経緯で見いだされた。アカデミック・ライティングをテーマとして2022年11月に開催された法政大学大学院公共政策研究科設立十周年記念シンポジウムを準備する過程で、同研究科に在籍する複数の院生からざくばらんに話を聞く機会があった。学術論文を書く上での苦労話をたずねたところ、社会人院生ならではの興味深い意見を聞くことができた。仕事上での文章の書き方が「なまじ身についている」ので、学術論文を書くことに「一般の学生より苦労した」というのである。その「苦労」の内容としては、たとえば文章の長さの違いが指摘された。実務上では文章をA4で1ページにまとめる必要があり、それ以上だと読んでもらえない場合もある。そういう「書き方、考え方」に慣れていない。文章は「実務においては短ければ短いほどいい」。よって、何万字も書くという学

術論文の書き方、考え方に適応しづらい。「社会人だから、仕事におけるルールがあってそこから抜けれられない」などといった内容であった<sup>2</sup>。

ここで示された論点は、早稲田大学のアカデミック・ライティング教育部門長である佐渡島沙織が指摘するところの、社会人院生が書く文章の特徴と符合する。「社会で仕事をしてきた人の文章」は「効率よく要点を伝える」文章であり、また勤務先の習慣や定型に沿った書き方だという。それは箇条書きや体言止めを使い、「表現の緻密さよりもスピードを重視」するような文章である（佐渡島 2023: 9-10）。社会人院生の、効率的に要点がまとめられるという特徴は、学術論文を執筆するうえでもアドバンテージとなろう。しかし「緻密」ではないという特徴は、それが論証の弱さに影響するならば、深刻なディスアドバンテージとなろう。

この社会人院生に特有の「苦労」、すなわち実務上の執筆習慣と学術論文のモードが干渉するというフラストレーションの実態を客観的に把握するために、同シンポジウムに先立って実施したアンケート調査にこの論点を組み込んだ。アンケート調査の詳細については後述するが、ここでは関連する結果について簡単に言及しておく。まず、勤め先で文章を書くとは回答した人のうち約70%がこのフラストレーションを経験していた。次に、フラストレーションの要因としては、先に指摘されていた文章の「簡潔—緻密」の違いのほかに、次のような項目についての混乱が生じていることがわかった。言葉の使い方、想定される読み手、主観の扱い、オリジナリティの必要性、先行研究への応答、引用作法である（西谷内 2023: 71-73）。

このように、実務上の執筆のモードと学術上の執筆のモードには一定の乖離があり、社会人院生は両者のモードを使い分けなくてはならず、その使い分けにはしばしば混乱の伴うことがわかった。このことは、実務的な文章を書くことと学術的な文章を書くことが不可避に干渉し、妨げあう関係にあることを意味するのだろうか。

本研究における筆者の作業仮説は否である。実務上の執筆習慣は必ずしも、学術的文章を執筆するさ

いの阻害要因になるわけではないと考える。社会人院生が実務的な文章と学術的な文章の間のモード切り替えにフラストレーションや困難を覚えるとすれば、両者のモードが不可避に干渉する性質をもつからではなく、(モード切り替えに困難を覚えるところの)社会人院生が学術的な文章の定義やかたちを明確に理解していないことに起因すると考える。青年院生であっても論文の定義やかたちを体得するまでは暗中模索の執筆訓練を経験するわけで、社会人院生もちょうど同様の模索を経験しているにすぎない。いいかえると、実務的な文章と学術的な文章の両方の輪郭を熟知している社会人院生は、両者のモードを切り替えて書き分けることにそれほど困難を覚えないと予想する。このような仮説を元に本稿では分析を進める。

本研究の目的は、多くの社会人院生がアカデミック・ライティングにおいて経験しているフラストレーションの原因を明らかにし、解決の糸口を見いだすことである。次節では、本研究の調査と分析の方法を説明する。続いて、結果、考察、結論の順に議論をすすめる。

## 2. 調査・分析の方法

### 2.1. 調査データの収集方法

この節では本研究の調査と分析の方法を説明する。調査手法はアンケート調査である。具体的には、法政大学大学院公共政策研究科設立十周年記念シンポジウムに先立ってアカデミック・ライティングに関するアンケート調査を実施した。本研究では、そのアンケート結果の一部を分析の対象とする。

アンケート調査の対象は同研究科および連帯社会インスティテュートの在籍院生144名である。これには休学者も含まれる。法政ポータルサイト(Hoppii)の「お知らせ配信」を介して回答を依頼し、Googleフォームで回答を回収した。回答期間は2022年10月10日から10月31日までとしていたが、期限後の11月4日に回答された1件も分析対象に含めた。結果的に回答数は50件、回答率は35%である。すべてが有効回答であった。

アンケートの質問内容は、フェイスシート項目に加えて、学術論文の発表実績、学術論文の学習経験、学術論文執筆に関する能力の自己評価、学術論文の書き方の学習方法、今後の研究科のライティング教育といった項目で実施した(西谷内 2023)。その中から本研究では、フェイスシート項目の一部、学術論文の発表実績、そして学術論文執筆に関する能力の自己評価の結果をもとに分析を行う。

### 2.2. 分析方法

データの分析は大きく二つの段階に分けて実施する(図1)。一段階目は、勤務先で実務的な文章を書くグループと書かないグループを比較する。二段階目は、一段階目で抽出された実務執筆群のうち、実務的な文章のモードと学術的な文章モードとの切り替えに「頻繁に困難を覚える」「たまに困難を覚える」「困難を覚えたことはない」と回答した3つのグループを比較する。比較する項目はおもに、学術論文の発表実績および執筆能力についての自己評価である。分析ツールは記述的分析とフィッシャーの正確確率検定(両側)を用い、有意水準は5%とする。統計ソフトはEZRを使用した。

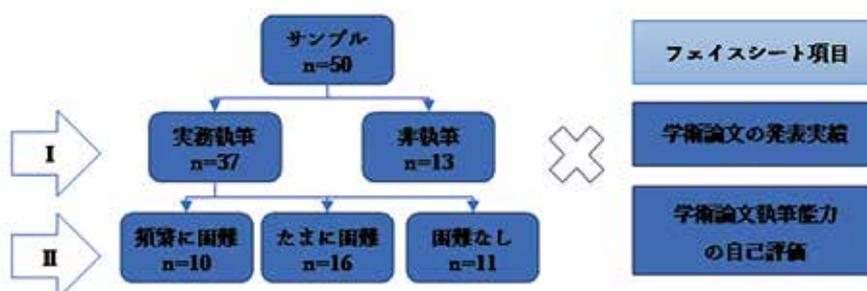


図1 分析項目の概要

### 2.3. 学術論文執筆能力の構成要素モデル

学術論文の執筆能力はどのように測定できるだろうか。そもそも学術論文を執筆する能力はどのような要素から成り立っているだろうか。この問いはそれ自体が大きな研究テーマとなるため本稿で深くは扱わない。ここでは本研究で用いた評価モデルについて——その完成度や是非はともあれ——その考え方について説明する。図2は、二通信子ほか(2004)が提示した「アカデミック・ライティングの構成要素」という図をもとに、筆者が自身の問題関心に則して大幅に手を加えたものである。その際には、アカデミック・ライティングの複数のテキストから、ライティング教育で扱われている学習項目を抽出した(たとえばTuribian 2018; 佐渡島・吉野 2021; 小熊 2022; 井下 2019)。また、プロダクトアプローチ、プロセスアプローチ、ポストプロセスアプローチといった、ライティング教育の変遷についての議論も参考にした(この議論は西谷内 2022にまとめた)。

このモデルでは学術論文を執筆するために必要な諸能力を、「専門」「作法」「研究」「基礎」という4つのカテゴリーに分けて捉える。そのうち、大学や大学院におけるライティング教育の主な対象となるのが「作法」と「研究」である。「作法」は知識の

領域であり、学術論文の定義や型を知識として分かっているか否かが問題となる。比較的短期間で獲得できる能力であるが、「知っている」ではなく「分かっている」という段階、つまり聞いたことがあるだけではなく、理屈を納得し、他者に説明できる程度に理解が定着していることが期待される。それに対して「研究」は「出来る」の段階であり、それはすなわち技術の領域である。「作法」の知識はもちろんのこと、「専門」や「基礎」の能力を適宜動員しながら、実際に議論を構築できることを意味する。これは、部分的な練習と統合的な練習を長期的に何度も繰り返すことで獲得されるような能力である。

次に残りの二つのカテゴリーに目を移そう。「専門」は理論モデルや実験・調査手法など、ディシプリン(専門となる学問体系)ごとに特化される内容であるため、共通科目としてのライティング教育では扱にくい領域である(ただし完全に等閑視できるわけでもない)。同様の理由から、本研究のアンケート調査には含めていない。最後に、「基礎」は幼児期に言葉を覚えるところから始まるところの、人間としての基礎的な言語表現力や論理的思考力などの領域を指している。学術論文を執筆するため

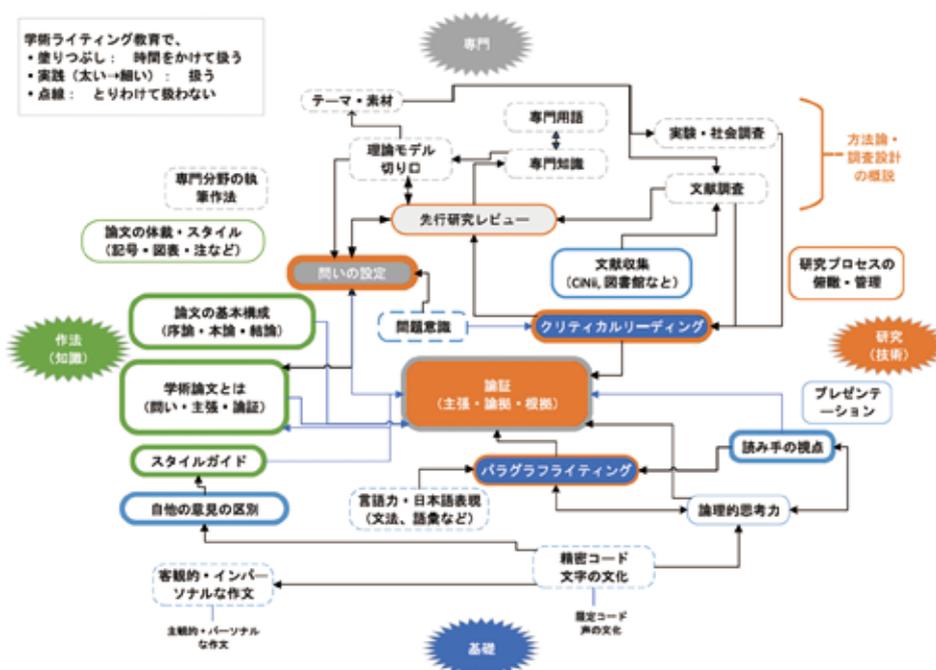


図2 学術論文執筆能力の構成要素モデル

の、文字通り基礎的能力であるため、本アンケート調査にも含めている。また、大学の大衆化に伴い、基礎カテゴリーの教育ニーズは、初等・中等教育のみならず、高等教育においても高まりつつある（西谷内 2022）。つまり基礎カテゴリーは、大学や大学院のライティング教育においてメインではないが無視もできない領域である。

学術論文を執筆する能力をこのように捉えて、アンケート調査では下記15項目の設問を作成した（表1）。「基礎」カテゴリーがA1からA8までの8項目、「作法」カテゴリーがB1からB3までの3項目、「研究」カテゴリーがC1からC4までの4項目である。そして表1の右列は実際に調査票で用いた設問文である。設問文の作成に際しては、自己評価という主観的な判断を能力測定の指標として用いるという設

計上の弱点を少しでも克服すべく、回答者が質問内容を具体的にイメージできる表現を心がけた。

### 3. 結果

#### 3.1. 主要項目の概要

この節では分析の結果について報告する。最初の項では、メインとなる分析結果に先立ち、分析対象となる変数ごとの結果概要を示す。目的変数となるのが実務執筆とモード切り替えの困難である。そして説明変数となるのは論文発表実績、自己評価モデル、年齢、専攻、そして勤務先で書く文章のタイプである。

表 1 学術論文執筆能力の評価項目

	項目名	調査票の設問文
基礎	A1 日本語表現	日本語の文法や語彙を人並みに使うことができる。——何を言いたいのか分からない、「てにをは」がおかしいと言われたことはあまりない。
	A2 客観的文章	書き手中心ではなく、対象を中心とした客観的な作文ができる。——具体的には、一人称の使用、主観的、あいまいな表現をできるだけ避けて、ある程度断定的に事実を記述する書き方ができる。
	A3 文献収集	文献を収集する方法を知っているし自由に実践できる。——つまり、CiNiiや図書館などを使い慣れている。（ここでは外国語文献の検索能力は問わない）
	A4 問題意識	授業や読書の際に、受動的に知識を得るだけではなく、自分なりの疑問や関心が新たにうまれたり、それに引き付けて考えたりすることが多い。
	A5 引用（自他の区別）	自分の意見と他者の意見を区別できる。加えて直接引用と間接引用の違いが分かる。
	A6 批判的読み	先行研究を読む際に、感心し納得しながら読むだけではなく、議論の構造を捉えたり、批判的に読んだりすることができるし、そうしている。
	A7 読み手の視点	書いたものが伝わらないのは、読み手の理解力のせいではなく書き手の問題と捉え、読み手の視点から文章を書いたり推敲したりしている。
	A8 論証型作文	理路整然と首尾一貫した文章を書くことができる。（ちなみに、パラグラフライティングができる場合は「自信あり」です）
作法	B1 スタイルガイド	特定のスタイルガイドに則して、適切な引用処理ができる。
	B2 論文の基本構成	学術論文における序論・本論・結論について、それぞれが一般的にどのような役割を持っており、何を書けばよいのか、他者に説明できる程度まで理解している。
	B3 学術論文の定義	学術論文と他の文章の違いがよくわかる。——たとえば、学術論文とは「問いと答えと論証からなる」という意味を明確に説明できる。
研究	C1 先行研究	自分の研究が先行研究にどう位置づけられるのかを、常に概ね、明確に捉え説明することができる。
	C2 問いの設定	自分の問題関心を、比較的容易に、学術的な問いに接続することができる。——オリジナリティが弱いと指摘されたことはほとんどない。
	C3 主張の明確化	少なくとも執筆終盤において、自分の言いたいこと（＝主張、答え）がなんであるのかを1～2文程度で明確に答えられる。——総花的、サマリー的などと指摘されたことはほとんどない。
	C4 体系的な議論構築	議論を分節化・階層化し、客観的な根拠を示しながら、自分の言いたいこと（＝主張、答え）を体系的に論証する方法を知っているし（我流であっても）、そうしている。

### 3.1.1. 実務執筆の有無

回答者50名のうち勤務先でA4×1枚以上の文章を1年に1回以上書くと回答した人が37名である。残りの13名の内訳は、勤務先でそれほど文章を書かない人が10名、無職が3名である。両者のグループをそれぞれ「実務執筆群」「非執筆群」とよぶ(表2)。

表2 実務執筆の有無ごとの度数分布

	度数	相対度数
実務執筆	37	0.74
非執筆	13	0.26
合計	50	1.00

サンプルの分布をみると、全体的に有職者が多く、その中でも実務執筆群が多い。具体的には、50名中47名が有職者である。無職者の内訳は、1名が70代の旧有職者で、2名が20代であるため、いわゆる青年院生と推測される。また、有職者47名のうちの37名が実務執筆者である。

### 3.1.2. モード切り替えの困難

勤務先で文章を書くときと回答した37名のうち、勤務先で書く実務的な文章のモードと、大学院で書く学術的な文章のモードの切り替えに困難を覚えるか否かをたずねたところ、「困難は覚えない」が11名、「たまに困難を覚える」が16名、「頻繁に困難を覚える」が10名であった(表3)。

表3 モード切り替え困難の頻度ごとの度数分布

	度数	相対度数
困難なし	11	0.30
たまに困難	16	0.43
頻繁に困難	10	0.27
合計	37	1.00

中間に位置する「たまに困難」を最大値として、「困難なし」と「頻繁に困難」の3つのグループはおおむね同規模に分散している。

### 3.1.3. 論文発表実績

論文発表実績をもつ者はそれほど多くはなく、50名中32名は発表実績がない。それらも含めて、それぞれの論文発表実績を次のように数値化した。まず、アンケートでは「これまで提出した／発表したことのある学術論文の種類」を経験の有無でたずねた。論文の種類について、アンケートでは学位論文も含めたが、本研究ではそれを除く。よって、本研究では「投稿論文(査読なし)」「投稿論文(査読あり)」「編書の一部をなす単著論文」「書籍(単著)」の4項目を論文発表実績の対象とする。その集計結果は表4のとおりである。たとえば次のように読むことができる。たとえば単著書籍については、3名が刊行した経験をもつ。その内2名が博士課程に在籍し、1名が修士課程に在籍している。なお、複数回答可のため、一人の個人が複数種の発表実績をもつ場合がある。

表4 学術論文の発表実績(論文の種類別)

	査読なし	査読あり	編書	単著
博士課程	8	9	5	2
修士課程	6	1	2	1
合計	14	10	7	3

このデータを、個人ごとの論文発表実績値として扱う目的において、項目ごとに点数の重み付けを行った。査読なしを1点、査読ありを2点、編書を1点、単著を3点とした。学術論文を発表した経験のない(0点)32名を含め、個人ごとの論文発表実績点は表5のとおりである。

表5 学術論文の発表実績点の度数分布

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	合計
博士課程	7	1	3	3	2	0	1	1	18
修士課程	25	4	2	0	0	1	0	0	32
合計	32	5	5	3	2	1	1	1	50

表5の度数分布から、クロス集計を行う際には、サンプルサイズの小さい3～7点を1つの階級にまとめて発表実績値とした。その結果が表6である。発表実績値を博士課程と修士課程に分け、階級ごと

表6 学術論文の発表実績値の度数分布

	0点	1点	2点	3～7点	度数(相対度数) 合計
博士課程	7 (0.39)	1 (0.06)	3 (0.17)	7 (0.39)	18 (1.01)
修士課程	25 (0.78)	4 (0.13)	2 (0.06)	1 (0.03)	32 (1.00)
合計	32 (0.64)	5 (0.10)	5 (0.10)	8 (0.16)	50 (1.00)

の度数と、括弧内に相対度数を示した。

博士・修士ともに0点(発表実績なし)の割合が多く、博士では39%、修士では78%を占めている。ただし博士の場合は3～7点の割合も多く、0点と同様の39%が高い発表実績値をもつ。検定結果をみても——当然ではあるが——修士よりも博士の方が、発表実績値が有意に高い(p=0.002)。

### 3.1.4. 学術論文執筆能力の自己評価

先述した学術論文執筆能力の評価モデルに則して、回答者に自己評価をしてもらった結果を表7に示す。「自信がない」「中間」「自信がある」の3段階の回答結果については、それぞれの度数と括弧内に相対度数を示した。また、「自信がない」を0点、「中間」を1点、「自信がある」を2点として換算し、それぞれの平均点を最右列に示した。得点は2点満点のため、2に近ければ「自信がある」の割合が多く、0に近ければ「自信がない」の割合が多いことになる。

平均点の最も高い項目が「A4 問題意識」の1.48点で、60%が「自信がある」と回答した。次いで平均点の高い項目は「A1 日本語表現」の1.28点、「A7 読み手の視点」の1.22点である。反対に、平均点の最も低い項目が「B1 スタイルガイド」と「C2 問いの設定」がともに0.84点。次いで「A6 批判的読み」と「C1 先行研究」がともに0.90点である。なお、「自信がない」の度数がもっとも大きいのは「C1 先行研究」で、34%が「自信がない」と回答した。

この回答結果をもとに、自己評価総合点を算出した。具体的には、上述した点数をすべて合計して10点満点に換算した(小数点以下四捨五入)。その結果として得られた度数分布が表8である。

表7 自己評価結果の概要

	自信がない	中間 度数(相対度数)	自信がある	(n=50) 平均点
A1 日本語表現	8 (0.16)	20 (0.40)	22 (0.44)	1.28
A2 客観的文章	10 (0.20)	27 (0.54)	13 (0.26)	1.06
A3 文献収集	9 (0.18)	26 (0.52)	15 (0.30)	1.12
A4 問題意識	6 (0.12)	14 (0.28)	30 (0.60)	1.48
A5 引用(自他の区別)	10 (0.20)	24 (0.48)	16 (0.32)	1.12
A6 批判的読み	16 (0.32)	23 (0.46)	11 (0.22)	0.90
A7 読み手の視点	8 (0.16)	23 (0.46)	19 (0.38)	1.22
A8 論証型作文	9 (0.18)	28 (0.56)	13 (0.26)	1.08
B1 スタイルガイド	14 (0.28)	30 (0.60)	6 (0.12)	0.84
B2 論文の基本構成	16 (0.32)	22 (0.44)	12 (0.24)	0.92
B3 学術論文の定義	13 (0.26)	24 (0.48)	13 (0.26)	1.00
C1 先行研究	17 (0.34)	21 (0.42)	12 (0.24)	0.90
C2 問いの設定	16 (0.32)	26 (0.52)	8 (0.16)	0.84
C3 主張の明確化	15 (0.30)	17 (0.34)	18 (0.36)	1.06
C4 体系的な議論構築	15 (0.30)	23 (0.46)	12 (0.24)	0.94

表 8 自己評価総合点の度数分布

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	合計
博士課程	0	0	2	0	1	2	3	2	6	2	18
修士課程	3	2	3	3	4	4	6	2	3	2	32
合計	3	2	5	3	5	6	9	4	9	4	50

クロス集計の際は、表 8 の結果をもとに、0～3点、4～5点、6～7点、8～9点の4階級にまとめて自己評価総合値とした。表 9 は博士課程と修士課程に分けて、階級ごとの度数と括弧内に相対度数を示している。

相対度数をみると、博士課程では8～9点が44%と最も多く、修士課程では0～3点が34%と最も多い。修士課程よりも博士課程の方が、学術論文執筆能力の自己評価値は高い傾向にある。ただし、統計的な有意差は認められない ( $p=0.096$ )。

### 3.1.5. 年齢

年齢の分布は表10の通りである。アンケートでは20代、30代、…との選択肢を設けた。よって、平均と標準偏差はそれぞれの階級値 (25, 35, …) から算出した。また、クロス集計を実施する際には、20/30代、40代、50代、60/70代の4階級にまとめた。

表10をみると、全体的には50代が最も多い。課程別にみると、博士課程は圧倒的に50代が多く67%を

占める。修士課程はより若い方に偏り、ばらつきも大きい。40代が最も多く34%、次いで30代が25%、50代が19%である。

### 3.1.6. 専攻

調査対象となった専攻やコースは次の4つにわけられる。公共政策研究科のサステイナビリティ学専攻、そして公共政策学専攻の公共マネジメントコースと政策研究コース。そして別の研究科である連帯社会インスティテュートである。それらを便宜上、「サス」「公共」「政策」「連帯」と記す。それらの度数分布は表11の通りである。

連帯社会インスティテュートは修士課程のみで博士課程は設置されていない。グループごとのサンプルサイズは、サステイナビリティ学専攻が最も大きく19人、政策研究コースが最も少なく8人である。

### 3.1.7. 勤務先で書く文章のタイプ

アンケートでは、勤務先で書く文章のタイプについて次の3つの選択肢を設け、複数回答可とした。

表 9 自己評価総合値の度数分布

	0～3点	4～5点	6～7点	8～9点	度数(相対度数) 合計
博士課程	2 (0.11)	3 (0.17)	5 (0.28)	8 (0.44)	18 (1.00)
修士課程	11 (0.34)	8 (0.25)	8 (0.25)	5 (0.16)	32 (1.00)
合計	13 (0.26)	11 (0.22)	13 (0.26)	13 (0.26)	50 (1.00)

表 10 年齢の度数分布

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	合計
博士課程	1	2	1	12	1	1	18
修士課程	4	8	11	6	2	1	32
合計	5	10	12	18	3	2	50

表 11 専攻の度数分布

	サス	公共	政策	連帯	合計
博士課程	8	7	3	0	18
修士課程	11	6	5	10	32
合計	19	13	8	10	50

「説明型（事実の説明。マニュアル・報告書など）」  
 「論証型（特定の見解を、客観的な根拠を示して主張。提案書など）」  
 「随筆型／文学的文章（主観的感想や創作世界を比較的自由に表現。ブログ・小説など）」。  
 これらを便宜上「説明型」「論証型」「随筆型」と記す。それぞれ、29名、23名、7名が勤務先で当該型の文章を執筆すると回答した。

### 3.1.8. 修士課程と博士課程の比較

以上の変数について、課程別に比較した結果の一覧が表12である。表内には修士課程32名と博士課程18名のそれぞれの平均値と、括弧内には標準偏差を示している。最右列はFisher検定のp値を記した。

実務執筆の項目については、実務執筆群を「1」、非執筆群を「0」として平均値と標準偏差を算出した。修士課程の平均値が0.7、博士課程の平均値が0.9であることより、博士課程の方が実務で執筆をする

割合の高いことがわかる。また、モード切り替えの困難については、頻繁に困難が「2」、たまに困難が「1」、困難なしを「0」として平均値と標準偏差を算出した。修士課程の平均値が1.1、博士課程の平均値が0.8であることより、修士課程の方が困難を覚える割合が高い。しかし、いずれも統計的な有意差はない。

その他の項目においても、修士課程と博士課程の差異を確認しておこう。フェイスシート項目において、年齢は博士課程の方が高く、統計的有意差もみられる ( $p < 0.01$ )。専攻にも統計的有意差がみられるが、それは連帯に博士課程が存在しないことを反映している。連帯を除いた3つの専攻を比較した場合に有意差はみられない ( $p=0.768$ )。次に、論文発表実績値は修士より博士の方が高い。平均値をみると、0.4点と2.1点との差があり、統計的有意差もある ( $p < 0.01$ )。

表12 修士課程と博士課程を比較した分析結果一覧

	修士課程 (n=32)	博士課程 (n=18)	Fisher検定
	平均値 (標準偏差)		
<b>フェイスシート項目</b>			
年齢 (才)	44.1 (12.3)	52.2 (11.3)	0.004**
専攻	サス11名, 公共6名, 政策5名, 連帯10名	サス8名, 公共7名, 政策3名	0.031*
<b>実務執筆</b>			
実務執筆 (0-1 無-有)	0.7 (0.5)	0.9 (0.3)	0.099
モード切り替えの困難 (0-2 なし-頻繁) (n=21/16)	1.1 (0.7)	0.8 (0.8)	0.279
<b>主要な説明変数</b>			
論文発表実績 (0-7点)	0.4 (1.0)	2.1 (2.2)	0.002**
自己評価総合 (0-10点)	4.5 (2.6)	6.4 (2.1)	0.096
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>			
A1 日本語表現	1.3 (0.8)	1.2 (0.6)	0.282
A2 客観的文章	1.0 (0.7)	1.1 (0.6)	0.353
A3 文献収集	0.9 (0.7)	1.5 (0.5)	0.009**
A4 問題意識	1.4 (0.8)	1.7 (0.6)	0.435
A5 引用 (自他の区別)	1.0 (0.7)	1.4 (0.7)	0.116
A6 批判的読み	0.8 (0.8)	1.1 (0.7)	0.205
A7 読み手の視点	1.1 (0.7)	1.4 (0.7)	0.450
A8 論証型作文	1.1 (0.8)	1.1 (0.5)	0.064
B1 スタイルガイド	0.8 (0.6)	1.0 (0.6)	0.358
B2 論文の基本構成	0.7 (0.7)	1.3 (0.8)	0.035*
B3 学術論文の定義	0.8 (0.7)	1.4 (0.6)	0.005**
C1 先行研究	0.6 (0.7)	1.4 (0.7)	0.002**
C2 問いの設定	0.7 (0.7)	1.1 (0.6)	0.066
C3 主張の明確化	0.9 (0.8)	1.3 (0.8)	0.351
C4 体系的な議論構築	0.8 (0.8)	1.1 (0.7)	0.356

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$

最後に論文執筆能力の自己評価については、項目ごとにばらつきをもちつつも一定の傾向がみられる。それぞれの平均値をみると、博士課程の方がおおむね高得点もしくは同点である。ただし、「A1 日本語表現」についてのみ逆転し、修士課程の方がわずかに高得点である。検定結果をみると、1%水準で有意差のあるのが「A3 文献収集」「B3 学術論文の定義」「C1 先行研究」である。5%水準の確率で有意差のあるのが「B2 論文の基本構成」で、それぞれ博士課程の方が有意に高得点である。

### 3.2. 勤務先で実務的な文章を書くか否か（第一段階）

ここからは本題となる分析結果について報告する。第一段階の分析結果一覧が表13である。実務執筆群と非執筆群に分けて、フェイスシート項目、論文発表実績、論文執筆能力の自己評価について分析

した。表12と同様で、在籍課程と専攻を除く項目は全て各グループの平均値と、括弧内に標準偏差を示す。また最右列には、フィッシャーの正確確立検定のp値を示す。

まず検定結果をみると、ほとんどの項目について、実務執筆群と非執筆群の間に有意な差は認められない。ただし「C4 体系的な議論構築」についてのみ、実務執筆群の方が非執筆群より有意に高得点である ( $p < 0.01$ )。次に平均値を比較すると、すべての項目において実務執筆群の方が、非執筆群よりも高得点もしくは同点である。

### 3.3. モード切り替えの困難をどれほど覚えるか（第二段階）

第二段階の分析結果一覧を表14に示す。勤務先で実務的な文章を書く「実務執筆群」のうち、実務的

表13 実務執筆群と非執筆群を比較した分析結果一覧

	実務執筆 (n=37)	非執筆 (n=13)	Fisher検定
	平均値 (標準偏差)		
<b>フェイスシート項目</b>			
年齢 (才)	48.8 (10.2)	41.9 (15.9)	0.089
在籍課程	修士21名, 博士16名	修士11名, 博士2名	0.098
専攻	サス14名, 公共10名, 政策7名, 連帯6名	サス5名, 公共3名, 政策1名, 連帯4名	0.684
<b>主要な説明変数</b>			
論文発表実績 (0-7点)	1.3 (1.9)	0.2 (0.6)	0.264
自己評価総合 (0-10点)	5.5 (2.6)	4.3 (2.3)	0.363
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>			
A1 日本語表現	1.3 (0.7)	1.2 (0.8)	0.698
A2 客観的文章	1.1 (0.7)	0.9 (0.6)	0.682
A3 文献収集	1.2 (0.7)	1.0 (0.6)	0.325
A4 問題意識	1.5 (0.7)	1.5 (0.6)	0.637
A5 引用 (自他の区別)	1.2 (0.8)	1.0 (0.6)	0.207
A6 批判的読み	0.9 (0.7)	0.8 (0.9)	0.135
A7 読み手の視点	1.3 (0.7)	1.0 (0.7)	0.392
A8 論証型作文	1.1 (0.6)	1.1 (0.7)	0.744
B1 スタイルガイド	0.9 (0.6)	0.7 (0.6)	0.637
B2 論文の基本構成	1.0 (0.8)	0.6 (0.6)	0.248
B3 学術論文の定義	1.1 (0.7)	0.7 (0.7)	0.190
C1 先行研究	1.0 (0.8)	0.7 (0.7)	0.508
C2 問いの設定	0.9 (0.7)	0.6 (0.6)	0.459
C3 主張の明確化	1.1 (0.8)	0.8 (0.9)	0.369
C4 体系的な議論構築	1.1 (0.7)	0.6 (0.8)	0.008**

\*\* $p < 0.01$

な文章のモードと学術的な文章のモードの切り替えに困難を「頻繁に覚える」「たまに覚える」「困難を覚えない」グループに分けて、フェイスシート項目、論文発表実績、論文執筆能力の自己評価について分析した結果一覧である。第一段階の分析結果と同様に、在籍過程と専攻を除く項目は全て各グループの平均値と、カッコ内に標準偏差を示している。また最右列には、3つのグループ間の統計的差について、フィッシャーの正確確立検定のp値を示す。

まず、勤め先で書く文章のタイプが説明型、論証型、随筆型のいずれであっても、モード切り替えの困難の程度との関連は認められない。次にフェイスシート項目である年齢、在籍過程、専攻についても統計的な差はない。ただし平均値をみると、年齢と博士課程の人数が「頻繁に困難」グループから「困

難なし」グループに向けて順番に高い値に推移している。専攻については特筆すべき違いは認められない。

最後に、学術論文の発表実績と執筆能力の自己評価には相関関係が認められた。まず3つのグループの平均点を比べると、自己評価の各項目を含めたすべての項目において、「頻繁に困難」グループから「困難なし」グループに向けて順番に高い点数に推移している。次に検定結果をみると、発表実績と自己評価総合点、および6つの自己評価下位項目（A4 問題意識、A5 引用、A6 批判的読み、A7 読み手の視点、B2 論文の基本構成、B3 学術論文の定義）において1%水準の有意差で、2つの下位項目（A3 文献収集、C2 問いの設定）において5%水準の有意差で、「困難なし」グループの方が高得点である。

表14モード切り替えの困難ごとの分析結果一覧

	頻繁に困難 n=10	たまに困難 n=16	困難なし n=11	Fisher検定
	平均値（標準偏差）			
<b>フェイスシート項目</b>				
年齢（才）	45.0 (8.9)	49.4 (12.2)	51.4 (6.4)	0.141
在籍課程	修士7名, 博士3名	修士10名, 博士6名	修士4名, 博士7名	0.279
専攻	サス1名, 公共2名, 政策5名, 連帯2名	サス8名, 公共4名, 政策1名, 連帯3名	サス5名, 公共4名, 政策1名, 連帯1名	0.118
<b>文章のタイプ（書く1-書かない0）</b>				
説明型	0.8 (0.4)	0.8 (0.4)	0.7 (0.4)	0.883
論証型	0.5 (0.5)	0.6 (0.5)	0.7 (0.4)	0.568
随筆型	0.2 (0.4)	0.1 (0.3)	0.3 (0.4)	0.591
<b>主要な説明変数</b>				
論文発表実績（0-7点）	0.9 (1.9)	1.2 (2.1)	1.7 (1.3)	0.005**
自己評価総合（0-10点）	3.5 (3.1)	5.3 (1.7)	7.8 (1.0)	0.000003**
<b>自己評価の各項目（0-2点）</b>				
A1 日本語表現	1.0 (0.8)	1.3 (0.7)	1.6 (0.5)	0.339
A2 客観的文章	0.9 (0.8)	1.0 (0.6)	1.5 (0.5)	0.125
A3 文献収集	0.9 (0.8)	1.0 (0.6)	1.6 (0.5)	0.045*
A4 問題意識	1.0 (0.8)	1.4 (0.7)	2.0 (0.0)	0.009**
A5 引用（自他の区別）	0.5 (0.7)	1.1 (0.6)	1.8 (0.4)	0.0004**
A6 批判的読み	0.5 (0.7)	0.8 (0.4)	1.5 (0.5)	0.0003**
A7 読み手の視点	0.8 (0.9)	1.4 (0.5)	1.6 (0.5)	0.004**
A8 論証型作文	0.8 (0.7)	1.1 (0.6)	1.4 (0.5)	0.159
B1 スタイルガイド	0.5 (0.5)	0.9 (0.6)	1.3 (0.4)	0.056
B2 論文の基本構成	0.5 (0.7)	0.9 (0.6)	1.7 (0.4)	0.001**
B3 学術論文の定義	0.6 (0.7)	1.1 (0.6)	1.6 (0.5)	0.007**
C1 先行研究	0.5 (0.5)	0.9 (0.7)	1.5 (0.7)	0.061
C2 問いの設定	0.5 (0.7)	0.9 (0.6)	1.4 (0.5)	0.023*
C3 主張の明確化	0.7 (0.8)	1.1 (0.7)	1.6 (0.5)	0.077
C4 体系的な議論構築	0.8 (0.7)	1.0 (0.6)	1.4 (0.5)	0.212

\*p<0.05, \*\*p<0.01

#### 4. 考察

社会人院生が勤務先で実務的な文章を書くことは、大学院で学術的な文章を書くことの阻害要因となるのか。この節では二段階の分析結果をもとに順を追って考察する。第一段階は実務執筆群と非執筆群を比較したもの。第二段階は実務執筆群のうち、実務と学術の文章モードの切り替えに困難を覚える頻度の異なる3つのグループを比較したものである。

なお本研究では、「結果」の節で示した、修士課程と博士課程を混在させた分析結果一覧をメインで扱う(表13・14)。しかし、課程の混在が説明要因を混乱させる可能性があるため、修士課程と博士課程をわけて同様の分析を行った結果の一覧を付録として末尾に掲載した(表15~18)。つまり、これ以降は、課程の混在した結果をメインとし、課程を分けた結果を補足的に考慮しながら考察を進める。課程を分けた結果を補足的なものとして扱うのは、もともとサンプルサイズが小さいうえに、それからさらに課程でグループ分けをした場合に、とりわけ博士課程についてサンプルサイズが極端に小さくなってしまふからである。

##### 4.1. 実務執筆の効果(第一段階)

第一段階の分析は、社会人院生が勤務先で実務的な文章を書くことが、大学院で学術的な文章を書くことの阻害要因となるのか否かについて考察すべく、実務執筆群と非執筆群を比較した。具体的にはまず、勤務先でA4×1枚以上の文章を1年に1回以上書くと回答した「実務執筆群」(n=37)と、書かないと回答した「非執筆群」(n=13)の学術的な発表実績、すなわち投稿論文と刊行書籍の発表実績値を比較した。

実務上の執筆習慣が学術論文執筆の阻害要因となるのであれば、実務執筆群の方が非執筆群に比して学術論文の発表実績値が低くなると考えられる。しかし結果として、フィッシャー検定のp値は0.264であり、実務的執筆習慣の有無と学術論文の発表実績の間に統計的有意差はみられなかった(表13)。

それどころか、両者の平均値を比較すると、実務執筆群の方が非執筆群よりも論文発表実績値が低いのではなく、反対に高い傾向にある。実務執筆群が1.3点、非執筆群が0.2点である。この傾向は課程を分けた分析においても同様にみられる(表15と表16)。このことより、実務上の執筆習慣は、学術論文執筆の阻害要因ではなく、むしろ促進要因として働いている可能性が示唆される。この傾向は、次の分析においても同様にみられる。

次に、実務執筆群と非執筆群の学術的執筆能力の自己評価結果を比較する。実務上の執筆習慣が学術論文の書き方を学び体得する上での阻害要因となるのであれば、実務執筆群の方が非執筆群に比して学術論文執筆能力が低くなるはずである。よって、自己評価も低く示されることが予想される。しかしフィッシャー検定のp値は0.363であり、実務的執筆習慣の有無と論文執筆能力の自己評価の間に統計的有意差はみられなかった(表13)。

それどころか自己評価についても、両者の平均値を比較すると、実務執筆群の方が非執筆群に比して低いのではなく高い傾向にある(表13)。すべての項目において、執筆群の方が非執筆群よりも同等もしくは高い。とりわけ「C4 体系的な議論構築」については統計的にも実務執筆群の方が有意に自己評価が高い( $p < 0.01$ )。この傾向は課程を分けた分析においてもおおむね同様にみられる(表15と表16)。ただし、課程を分けた分析においては統計的に有意差のある項目はない。また、いくつかの項目において僅差での逆転現象もみられる。それでも全体的にみると、やはり圧倒的に、非執筆群よりも執筆群の方が平均値は高い傾向にある。

以上、学術論文の発表実績と執筆能力自己評価の分析から、勤務先で実務的な文章を書く人は、書かない人に比べて、より多くの論文を発表しており、また自身の学術論文執筆能力をより高く評価している傾向がみられた。このことから、実務的な文章の書き方に慣れていることが、学術的な文章を書いたり学んだりすることと不可避に干渉し対立する関係にあるとは考えにくい。むしろ、勤務先で習慣的に文章を書くことが、実務的であろうが学術的である

うが、作文の一般的な練習となり、また執筆作業への習慣づけ、そして執筆能力に対する自信に寄与している可能性が示唆された。

#### 4.2. モード切り替え困難の要因（第二段階）

それでは、多くの社会人院生が、実務的な文章と学術的な文章のモード切り替えに困難を覚えるのはなぜだろうか。第二段階の分析では、実務的と学術的な文章モードの切り替えに困難を「頻繁に覚える (n=10)」「たまに覚える (n=16)」「覚えがない (n=11)」と回答した3つのグループを比較する。

ここでの作業仮説は次のようなものである（帰無仮説ではなく、証明したい仮説である）。本研究では、モード切り替えに困難を覚える要因を、学術的な文章の定義やかたちを明確に理解していないことによると考えた。いいかえると、青年院生であっても論文の定義やかたちを体得するまでは暗中模索の執筆訓練を経験するわけで、社会人院生の場合はそれがモード切り替えの困難として経験されていると考えたのである。この仮説が正しければ、モード切り替えの困難を覚える社会人院生は、「B2 論文の基本構成」と「B3 学術論文の定義」の自己評価がより低いことになる。

結果として、課程の混在した分析においては仮説が支持された（表14）。「B2 論文の基本構成」と「B3 学術論文の定義」の平均値をみると、困難を覚える頻度の高いグループの方が自己評価の平均値が低い。統計的にみても、両者ともに有意差がみられた ( $p < 0.01$ )。課程別の分析においては、やや緩やかに、しかし同様の傾向がみられた（表17と表18）。修士課程では「B2 論文の基本構成」のみ、博士課程では「B3 学術論文の定義」にのみ統計的な有意差がみられた ( $p < 0.05$ )。

次に、自己評価のすべての項目に目を向けると、モード切り替えの困難と関連する項目が「B2 論文の基本構成」と「B3 学術論文の定義」だけではないことが分かる。その他多くの項目においても、困難を覚える頻度の高いグループの方が自己評価の平均値の低い傾向にある。まず、課程の混在した分析と修士課程のみの分析は傾向がたいへん似通ってお

り、すべての項目において「頻繁に困難」から「困難なし」にむけて自己評価の平均値が順番に高くなっている。また、両方の分析結果一覧においても有意差 ( $p < 0.05$ ) のある項目は「自己評価総合」、「A5 引用（自他の区別）」、「A6 批判的読み」、「A7読み手の視点」、「B2 論文の基本構成」、「C2 問いの設定」である。次に博士課程のみの分析結果一覧では、全体的な傾向は同様であるが、得点差が比較的少なく、僅差で逆転している項目もある。統計的有意差のある項目は「B3 学術論文の定義」だけである ( $p < 0.01$ )。

以上、モード切り替えに困難を覚える頻度と論文執筆能力の自己評価はおおむね負の相関関係にあることがわかった。つまり、モード切り替えの困難を覚えない人の方が、論文執筆能力の自己評価が高い。ただし作業仮説で想定していたところの、論文の定義やかたちという項目に関しては、それらが、注目すべき要素の一つではあるが、必ずしも決定的な説明要因ではないことがわかった。すなわち、学術論文の定義やかたちを知っているか否かだけではなく、その他のさまざまな能力の有無が、モード切り替えの困難と関連していた。

## 5. 結論

2022年10月に実施されたアンケート調査の結果、実務上の執筆習慣は、学術的文章を執筆するさいの阻害要因になるわけではなく、むしろ促進要因として働いていることが示唆された。すなわち、社会人院生が実務的な文章と学術的な文章のモード切り替えに困難を覚えるのは、両者のモードが不可避に干渉する性質をもつからとは考えにくいという結論が導き出された。そうではなく、モード切り替えの困難は、学術的な文章の書き方についての知識や技術が不足していることと関連している可能性の高いことが示唆された。

この結論は、近田の見解と軌を一にする。社会人院生は「研究関心が具体的である反面、学術論文を書くための基本スキルが不足している事例が多くみられた」という指摘である（近田 2008: 73）。本研

究においても、社会人院生の問題意識の高さが確認された反面、学術論文を書くためのスキルは「作法」と「研究」カテゴリのみならず、「基礎」カテゴリにおいても低いケースが確認された。本研究ではそのことが、モード切り替えの困難を引き起す要因として検討されたわけである。つまり、実務的文章を書きこなし、人生経験も豊富な社会人だからといって、学術論文の書き方についての知識や技術、加えて基礎的学習能力が必ずしも高いわけではないことがわかる。勤め先で作文訓練を十分に積んでいたとしても、学術的分野で執筆する際には改めて作文訓練を積む必要があることが再確認された。

この結論から、モード切り替えの困難を覚える社会人院生は、学術論文の書き方を知識のレベルで学び、さらに技術のレベルで習得することで、そのフラストレーションから解放される可能性が高いという、解決策への糸口が導き出される。さらに本研究では、社会人院生が苦手意識を持ちやすい分野（問いの設定やスタイルガイドなど）が明らかになった。この分析結果は、今後のアカデミック・ライティング教育に活かすことができる。

法政大学大学院公共政策研究科においては、2022年10月の設立十周年記念シンポジウムを契機として、それまで開講していた「公共政策論文技法」を2023年度からは「学術的文章作成演習」へと改変し、アカデミック・ライティング教育の強化に取り組んでいる。その授業実践において、教育的効果はもちろんのこと、社会人院生の学問的特性についての研究の深化も期待される。

以上、本研究は社会人院生の論文執筆における特性について先行研究を追検証し、また新たな知見を示すことができた。しかし残された課題も少なくない。まずはサンプルサイズの問題である。本調査ではサンプルサイズが小さいために、分析ツールは記述的分析とフィッシャーの正確確率検定を用いた。それでも変数を細分化するにつれて、傾向の異なる逸脱的な結果が示される場合があった。顕著なのは博士課程のモード切り替えの分析である（表18）。混在した分析や修士課程の分析とは反対に、モード切り替えの困難を覚えるグループの方が論文発表実

績値が順に高くなる結果となった。これが博士課程に特有の特性を示すものなのか、最小となるサンプルサイズが3個という方法上の問題であるのかは判断し難い。

さらには、学術論文執筆能力の測定を、実際の能力測定ではなく、自己評価によって代替せざるをえなかったことは本研究の重大な弱点である<sup>3</sup>。とりわけ、モード切り替えの困難と執筆能力自己評価の関連については、回答者の楽観的あるいは悲観的な回答傾向による疑似相関の影響している可能性が否めない。今後は実際の能力測定を用いた再検証に挑みたい。そのためには、学術論文の執筆能力を測定するテストの開発が喫緊の課題である<sup>4</sup>。

## 6. 謝辞

本研究は、2022年11月にアカデミック・ライティング教育をテーマとして実施された法政大学大学院公共政策研究科設立十周年記念シンポジウムの準備過程を通して、研究課題が生じられ、調査が実施されました。私事で恐縮ですが、筆者はアカデミック・ライティングをアメリカの大学院でややインテンシブに学び、その後も質的社会調査と論証型論文の執筆については多少なりとも経験を重ねてきたのですが、量的社会調査と仮説検証型論文の執筆をこのたび初めて経験しました。そのため本稿の執筆に際しては、まさに「モード切り替えの困難」を大いに経験することとなりました。未熟な筆者に、貴重な実践的研究機会を与えてくださった法政大学大学院公共政策研究科のみなさまに感謝を申し上げます。

## 7. 注

1 文部科学省「学校基本調査」の「大学院 年齢別入学人数」を参照した。ちなみに、2022（令和4）年から5年ごとに遡ってみると、2017（平成29）年の社会人入学割合は修士課程で約11%、博士課程で約41%、全体で約16%。2012（平成24）年では修士課程で約10%、博士課程で約37%、全体で約15%である。

2 インタビューは、2022年9月4日、オンラインで実

施した。院生参加者は全部で6名。当該フラストレーションについて意見を示したのは2名である。

3 自己評価の信憑性を勘案し——その信憑性の期待できる——査読付きの論文発表経験者のみを対象とする同様の検証も試みた。しかし、サンプルサイズが極端に小さくなるため分布を評価し難く、本調査結果を支持する根拠たりえなかった。ただし、否定する根拠としても弱いものとなった。念のために検証結果を記しておく。まず査読付きの論文発表経験者は10名で、そのうち9名が博士課程在籍の有職者で実務執筆者である（全員が説明型と論証型の両方もしくは一方の実務文章を執筆）。残り1名が修士課程在籍の無職者、つまり非実務執筆者である。両者の学術論文執筆能力の自己評価点を比較すると、たしかに自己評価点の最低値は非実務執筆者によるものだが、Fisher検定p値は0.2であり有意差は認められない。

注表1 学術的執筆能力自己評価点の比較（査読付き論文発表実績の実務執筆者と非実務執筆者）

自己評価点	0～3点	4～5点	6～7点	8～9点	合計
実務執筆	0	1	3	5	9
非実務執筆	1	0	0	0	1

次に、モード切り替えの困難ごとの度数分布は以下のとおりである。強いて言えば「困難なし」グループに自己評価点の高得点者が多いようにも見えるが、こちらもFisher検定のp値は0.857であり、統計的な有意差は認められない。

注表2 学術的執筆能力自己評価点の比較（査読付き論文発表経実績のモード切り替え困難ごと）

自己評価点	4～5点	6～7点	8～9点	合計
困難なし	0	1	3	4
たまに困難	1	1	1	3
頻繁に困難	0	1	1	2

4 その他にも改善すべき反省点は少なくないが、ここではほか3点を記録しておく。一つに、学術論文執筆のパフォーマンスと能力の測定方法に改善すべき点があった。執筆パフォーマンスについては、論文の発表経験の有無ではなく、発表した数を用いる方が妥当であった（ただし論文発表実績は全体的に少ない方に偏っているため、分析結果への影響は少なかったと考えられる）。二つに、学術論文執筆能力の自己評価の選択肢を「自信がない」「中間」「自信がある」の3段階に設定したことも反省点である。「中間」回答をより効果的に活かすためには、中間を「どちらかといえば自信がある」「どちらかといえば自信がない」とする4件法を用いるべきであった。三つに、学術論文の執筆モードを経験しない院生が存在するという可能性を等閑視してしまった。たとえば新入院生は、学術的な学期論文を書く機会をもたない限り、学術的な文章作成のモードに実践的に触れる

機会が無く、よってモード切り替えの困難とも無縁かもしれない。さらに公共政策研究科では、修士論文の代替として政策研究論文を修了要件として提出することが認められている（連帯社会インスティテュートでは認められていない）。この制度を利用する修士院生の場合、学術的文章のモードに関心をもたないまま課程を修了する場合もあり得る。そういう事態を視野に入れて、アンケートでは学術的文章を書く機会や関心の有無についても意識的に確認する必要がある。ただし、今回のアンケートにおいては、回答者すべてがアカデミック・ライティングへの関心を表明している（アカデミック・ライティング教育を受けることに関心がないと回答したのは50名中2名だけで、「ライティングには自信がある」からと回答）。このことより、すべての回答者がモード切り替えの必要について自覚しているわけで、分析結果への影響はそれほど大きくなかったと考えられる。ちなみに、政策研究論文制度の利用者もそれほど多くはなく、研究科設立以来（2014年度修了者以降）、2015年に1名（同年修了者全体の9%）、2022年に3名（同年修了者全体の10%）が同制度を利用しただけである。

## 8. 付録

## 8.1. 修士・博士別の実務執筆群/非執筆群の比較

表 15 修士課程の実務執筆群と非執筆群を比較した分析結果一覧

フェイスシート項目	実務執筆 (n=21)	非執筆 (n=11)	Fisher検定
	平均値 (標準偏差)		
年齢 (才)	44.0 (9.2)	44.1 (16.2)	0.398
専攻	サス 7 名, 公共 4 名, 政策 4 名, 連帯 6 名	サス 4 名, 公共 2 名, 政策 1 名, 連帯 4 名	0.954
<b>主要な説明変数</b>			
論文発表実績 (0-7点)	0.5 (1.1)	0.3 (0.6)	1.000
自己評価総合 (0-10点)	4.7 (2.8)	4.2 (2.2)	0.840
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>			
A1 日本語表現	1.3 (0.8)	1.3 (0.7)	0.888
A2 客観的文章	1.0 (0.8)	1.0 (0.6)	0.443
A3 文献収集	0.9 (0.7)	0.9 (0.5)	0.362
A4 問題意識	1.3 (0.8)	1.5 (0.5)	0.205
A5 引用 (自他の区別)	1.0 (0.8)	1.0 (0.4)	0.104
A6 批判的読み	0.8 (0.7)	0.8 (0.8)	0.630
A7 読み手の視点	1.2 (0.7)	1.0 (0.6)	0.558
A8 論証型作文	1.0 (0.7)	1.1 (0.8)	0.896
B1 スタイルガイド	0.8 (0.6)	0.7 (0.6)	1.000
B2 論文の基本構成	0.8 (0.7)	0.5 (0.5)	0.391
B3 学術論文の定義	0.9 (0.6)	0.5 (0.7)	0.442
C1 先行研究	0.7 (0.6)	0.5 (0.7)	0.860
C2 問いの設定	0.7 (0.7)	0.6 (0.6)	1.000
C3 主張の明確化	1.0 (0.8)	0.7 (0.9)	0.337
C4 体系的な議論構築	1.0 (0.7)	0.5 (0.8)	0.085

表 16 博士課程の実務執筆群と非執筆群を比較した分析結果一覧

フェイスシート項目	実務執筆 (n=16)	非執筆 (n=2)	Fisher検定
	平均値 (標準偏差)		
年齢 (才)	55.0 (7.9)	30.0 (5.0)	0.059
専攻	サス 7 名, 公共 6 名, 政策 3 名	サス 1 名, 公共 1 名, 政策 0 名	1.000
<b>主要な説明変数</b>			
論文発表実績 (0-7点)	2.3 (2.1)	0.0 (0.0)	0.680
自己評価総合 (0-10点)	6.6 (1.9)	5.0 (3.0)	0.400
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>			
A1 日本語表現	1.3 (0.6)	0.5 (0.5)	0.314
A2 客観的文章	1.2 (0.5)	0.5 (0.5)	0.255
A3 文献収集	1.5 (0.5)	1.5 (0.5)	1.000
A4 問題意識	1.8 (0.4)	1.0 (1.0)	0.150
A5 引用 (自他の区別)	1.4 (0.6)	1.0 (1.0)	0.216
A6 批判的読み	1.1 (0.6)	1.0 (1.0)	0.183
A7 読み手の視点	1.4 (0.6)	1.0 (1.0)	0.216
A8 論証型作文	1.1 (0.5)	1.0 (0.0)	1.000
B1 スタイルガイド	1.1 (0.6)	0.5 (0.5)	0.569
B2 論文の基本構成	1.3 (0.7)	1.0 (1.0)	0.451
B3 学術論文の定義	1.4 (0.6)	1.5 (0.5)	1.000
C1 先行研究	1.4 (0.7)	1.5 (0.5)	1.000
C2 問いの設定	1.2 (0.5)	0.5 (0.5)	0.255
C3 主張の明確化	1.3 (0.8)	1.5 (0.5)	1.000
C4 体系的な議論構築	1.1 (0.6)	1.0 (1.0)	0.183

8.2. 修士・博士別のモード切り替えの困難

表 17 修士課程のモード切り替え困難の頻度ごとに比較した分析結果一覧

フェイスシート項目	頻繁に困難 (n=7)	たまに困難 (n=10) 平均値 (標準偏差)	困難なし (n=4)	Fisher検定
年齢 (才)	40.7 (7.3)	46.0 (10.4)	45.0 (7.1)	0.814
専攻	サス 1 名, 公共 1 名, 政策 3 名, 連帯 2 名	サス 5 名, 公共 2 名, 政策 0 名, 連帯 3 名	サス 1 名, 公共 1 名, 政策 1 名, 連帯 1 名	0.389
<b>文章のタイプ (書く1-書かない0)</b>				
説明型	0.7 (0.5)	0.8 (0.4)	0.8 (0.4)	1.000
論証型	0.4 (0.5)	0.5 (0.5)	1.0 (0.0)	0.225
随筆型	0.3 (0.5)	0.2 (0.4)	0.3 (0.4)	1.000
<b>主要な説明変数</b>				
論文発表実績 (0-7点)	0.0 (0.0)	0.6 (1.5)	1.0 (0.7)	0.028*
自己評価総合 (0-10点)	2.7 (3.0)	4.8 (1.5)	8.0 (1.2)	0.0004**
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>				
A1 日本語表現	0.9 (0.8)	1.4 (0.6)	2.0 (0.0)	0.186
A2 客観的文章	0.7 (0.9)	1.0 (0.6)	1.8 (0.4)	0.113
A3 文献収集	0.6 (0.7)	0.8 (0.6)	1.8 (0.4)	0.101
A4 問題意識	0.9 (0.8)	1.3 (0.8)	2.0 (0.0)	0.313
A5 引用 (自他の区別)	0.3 (0.5)	1.0 (0.6)	2.0 (0.0)	0.003**
A6 批判的読み	0.4 (0.7)	0.7 (0.5)	1.5 (0.5)	0.019*
A7 読み手の視点	0.7 (0.9)	1.3 (0.5)	1.8 (0.4)	0.014*
A8 論証型作文	0.6 (0.7)	1.1 (0.5)	1.8 (0.4)	0.053
B1 スタイルガイド	0.4 (0.5)	0.8 (0.6)	1.3 (0.4)	0.321
B2 論文の基本構成	0.3 (0.5)	0.8 (0.6)	1.8 (0.4)	0.021*
B3 学術論文の定義	0.4 (0.5)	1.0 (0.6)	1.3 (0.4)	0.333
C1 先行研究	0.4 (0.5)	0.7 (0.6)	1.0 (0.7)	0.834
C2 問いの設定	0.4 (0.7)	0.6 (0.5)	1.5 (0.5)	0.029*
C3 主張の明確化	0.6 (0.7)	1.1 (0.7)	1.8 (0.4)	0.226
C4 体系的な議論構築	0.7 (0.7)	1.0 (0.6)	1.5 (0.5)	0.588

\*p < 0.05, \*\*p < 0.01

表 18 博士課程のモード切り替え困難の頻度ごとに比較した分析結果一覧

フェイスシート項目	頻繁に困難 (n=3)	たまに困難 (n=6) 平均値 (標準偏差)	困難なし (n=7)	Fisher検定
年齢 (才)	55.0 (0.0)	55.0 (14.1)	55.0 (0.0)	0.080
専攻	サス 0 名, 公共 1 名, 政策 2 名	サス 3 名, 公共 2 名, 政策 1 名	サス 4 名, 公共 3 名, 政策 0 名	0.254
<b>文章のタイプ (書く1-書かない0)</b>				
説明型	1.0 (0.0)	0.8 (0.4)	0.7 (0.5)	1.000
論証型	0.6 (0.6)	0.8 (0.4)	0.6 (0.5)	0.784
随筆型	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.3 (0.5)	0.650
<b>主要な説明変数</b>				
論文発表実績 (0-7点)	3.0 (3.0)	2.2 (2.8)	2.1 (1.5)	0.405
自己評価総合 (0-10点)	5.3 (3.1)	6.0 (1.8)	7.7 (1.0)	0.099
<b>自己評価の各項目 (0-2点)</b>				
A1 日本語表現	1.3 (0.6)	1.2 (0.8)	1.4 (0.5)	1.000
A2 客観的文章	1.3 (0.6)	1.0 (0.6)	1.3 (0.5)	1.000
A3 文献収集	1.6 (0.6)	1.3 (0.5)	1.6 (0.5)	0.674
A4 問題意識	1.3 (0.6)	1.7 (0.5)	2.0 (0.0)	0.059
A5 引用 (自他の区別)	1.0 (1.0)	1.3 (0.5)	1.7 (0.5)	0.300
A6 批判的読み	0.7 (0.6)	0.8 (0.4)	1.6 (0.5)	0.086
A7 読み手の視点	1.0 (1.0)	1.5 (0.5)	1.6 (0.5)	0.521
A8 論証型作文	1.3 (0.6)	1.0 (0.6)	1.1 (0.4)	0.896
B1 スタイルガイド	0.7 (0.6)	1.0 (0.6)	1.3 (0.5)	0.784
B2 論文の基本構成	1.0 (1.0)	1.0 (0.6)	1.7 (0.5)	0.243
B3 学術論文の定義	1.0 (1.0)	1.2 (0.4)	1.9 (0.4)	0.019*
C1 先行研究	0.7 (0.6)	1.3 (0.8)	1.7 (0.5)	0.255
C2 問いの設定	0.7 (0.6)	1.3 (0.5)	1.3 (0.5)	0.505
C3 主張の明確化	1.0 (1.0)	1.0 (0.9)	1.6 (0.5)	0.643
C4 体系的な議論構築	1.0 (1.0)	1.0 (0.6)	1.3 (0.5)	0.692

\*p < 0.05

## 9. 引用・参考文献

- Turabian, Kate, 2018, *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers, 9th ed.*, revised by Wayne Booth, Gregory Colomb, Joseph Williams, Joseph Bizup, William FitzGerald, and University of Chicago Press editorial staff, Chicago; London: The University of Chicago Press.
- 井下千以子, 2019, 『思考を鍛えるレポート論文作成法 第3版』慶應義塾大学出版会.
- 小熊英二, 2022, 『基礎からわかる論文の書き方』講談社.
- 近田政博, 2008, 「社会人大学院生を対象とする研究方法論の授業実践」『名古屋高等教育研究』8: 73-94.
- , 2015, 「社会人大学院生の学習特性・環境に適した教授法と研究指導方法の開発」科学研究費助成事業研究成果報告書, (2023年3月3日取得, <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-24653226/24653226seika.pdf>).
- 佐渡島紗織, 2023, 「基調講演 大学院におけるライティング教育の意義」法政大学大学院公共政策研究科『公共政策研究科設立十周年記念シンポジウム報告書』8-29, (2023年7月31日取得, [https://www.hosei.ac.jp/application/files/1416/7659/2607/20221126\\_symposium\\_Report.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/files/1416/7659/2607/20221126_symposium_Report.pdf)).
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子, 2021, 『これから研究を書くひとのためのガイドブック——ライティングの挑戦15週間 第2版』, ひつじ書房.
- 中村恵子・菅原真優美・渡邊タミ子, 2019, 「看護系社会人大学院生の修士論文作成における学びの過程」『新潟青陵学会誌』12: 1-12.
- 西谷内博美, 2022, 「日本における大学ライティング教育の変遷——プロダクト, プロセス, 脱アカデミア」『東京電機大学総合文化研究』20: 55-63.
- , 2023, 「学術的文章作成(アカデミック・ライティング)に関するアンケート集計結果」法政大学大学院公共政策研究科『公共政策研究科設立十周年記念シンポジウム報告書』63-79, (2023年3月11日取得, [https://www.hosei.ac.jp/application/files/1416/7659/2607/20221126\\_symposium\\_Report.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/files/1416/7659/2607/20221126_symposium_Report.pdf)).
- 二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子, 2004, 「アカデミック・ライティング教育の課題」『2004年度日本語教育学会春季大会予稿集』285-296.
- 三輪建二, 2020, 「社会人大学院生が採用する研究方法とは——ウォレス『教師がまとめる研究論文』を中心に」『星槎大学大学院紀要』1(2): 94-100.